丸山湿原群保全の会会報

（第 104 号）

発行日：平成 28 年５月 24 日　編集／発行：丸山湿原群保全の会

〒669-1211　宝塚市大原野字炭屋 1-1　西谷地区まちづくり協議会事務局内

TEL/Fax0797-91-1788

臨時連絡先　　090 - 1895 - 8061（今住）

E-mail：maruyamashitugengun@gmail.com

初夏を思わせる陽気に、植物もあわてて花を咲かせ始めたような気がします。観察できる花もまるで高山植物のように、何もかもが同時に開花しそうな今年です。楽しさと驚き、何か気味悪さを同時に感じています。こんな年もあると考えるか、やはり地球規模の変動と捉えるか、みなさんはどう思われますか？

気温の変化の大きい時期、体調には充分ご配慮ください。　　（今住　５月 15 日作成）

22 日（日）の活動後の報告になりました。22 日見られた植物は４枚目に掲載。

活動報告

★5 月 14 日（土）

６名で活動。定期基礎調査、巡回、観察、ごみ回収、枯れ枝撤去。快晴。

今回、試しに基礎調査の場所を集水域の違う第３湿原出口と第２湿原中間点（視点場下）で行いました。ほとんど違いはないと思われますが、樹木の伐採状況や水の流れから違う結果が見えてくるかもしれません。今年度の活動方針の一つとして提案予定です。結果は以下の通り。

【来場者数】

目的	市内	市外
丸山	29	16
ハイキング	40	32
その他	13	1

【定期基礎調査】

場所	時間	気温【水温】	電気伝導度
入口	10：05	24℃	
視点場	11：28	29℃	
第３湿原	10：55	【21℃】	27μS/cm
第１湿原	11：42	【21℃】	24μS/cm
第２湿原	12：00		30μS/cm

【駐車場・エントランス付近】

駐車場付近でここ数年見られるキンランの株が開花。元気な株でした。エントランスに入ったところにも別の株が見られ、日当たり次第でさらに数が増えるのではないかと思われます。下草刈りの必要性を感じます。きれいで華麗な花だけに盗掘も多いらしく、環境省ＲＤＢ絶滅危惧Ⅱ類（VU)に指定されています。根が深いのと、蘭菌（根に共生）が必要なため、まず「山取り」栽培は無理ということです。ササユリも同じですが、心無い行動は控えてほしいものです。

キンラン

【植　物】

湿原までの道々には、**ニガナ**、**モチツツジ**、**ツクバネウツギ**、**タニウツギ**の花々が咲き、**ウリカエデ**が種になり赤く美しい。**ツルニンジン**もたくさん生えてきました。湿原内では前回紹介した**イシモチソウ**（環境省ＲＤＢ準絶滅危惧種（NT））が花を咲かせてコバエのような虫やアリ？をキャッチ。渇きぎみの場所で咲きますが湿生植物です。水のある所では**ヤチカワズスゲ**と思われるスゲの仲間の植物が花序を伸ばしていました。いよいよ湿原の本領発揮時期になります。最初は**トキソウ？ノハナショウブ？**楽しみがつきませんね。

ヤチカワズスゲ

イシモチソウ

【動　物・昆　虫】

エントランス付近でかわいいコゲラの姿。第３湿原手前の水路で**タゴガエル**（県ＲＤＢ　Ｃランク）を見つけました。最初は、アカガエル？ヤマアカ？と色々な意見が出ましたが、口の下の模様が汚れているようについている点から、タゴガエルと同定しました。同じ水路に大きなヤゴも。流水系ヤンマのヤゴと思われますが種まではわかりませんでした。

タゴガエル

シオヤトンボはシオカラ状態のオスがぶんぶん飛び交いメスの争奪戦を繰り広げていました。丸山ではシオカラはまだ見かけないような気がします。飛び出してもいい時期なのですが。

水路近くの日陰では**ニホンカワトンボ**が多く確認できました。メタリックなボディーに細いシオカラの尾。なかなか精悍な感じです。（幼体はフルメタリックボディーです。）

ニホンカワトンボ

総会のお知らせ

日　時　６月26日（日）13：00～
場　所　自然休養村センター（２Ｆホール）・・・予定
議　題　①　役員人事提案
　　②　2015年度事業報告　決算報告
　　③　2016年度事業計画　予算計画
　　④　丸山湿原群おさらい学習会？（ＰＰＴで説明）

ハイカーの方たちとしばし交流

参加できない方は委任状の提出をお願いいたします。（はがき同封）

次回活動日６月11日（土）６月26日（日）７月９日（土）ご参加ください。
６月26日（日）は午前丸山湿原群保全活動、午後総会となります。片方だけの参加も大歓迎！

※本年度も西谷小学校３年生の環境学習を受け入れます。最初は６月４日（土）の座学から。土曜参観で保護者も参加されます。主に辰巳、水田、岩﨑会員が担当します。フィールドワーク １回目は６月28日（火）に決定。年度中に28日を含め、計３回のフィールドワークを計画されています。

今回（５月１５日）の植物・動物（全て丸山で撮影）

訂　正　前回アオダモを紹介しましたが、植物博士からの指摘で、マルバアオダモの間違いでした。葉にギザギザがない（わずかにある）ものです。西谷にはアオダモは生育していないということです。お詫びし訂正いたします。

ツクバネウツギ（衝羽根空木）この仲間はアベリア（総称）と呼ばれ庭木に使われる。

ツクバネウツギは関東以西に分布する落葉の低木。林縁部や明るい二次林に生育する。乾燥した尾根などよりも谷筋などの湿潤地に多い。５月頃に白い花を咲かせる。萼片（がくへん）は５つに広がり、果実になっても残る。萼は花時には緑色であるがやがて紅紫色になることが多い。果実を採って空中に放つとクルクル回ってゆっくりと落ちる。

木の姿がウツギ（空木）＝「卯の花」に似ており、果実に残る５枚の萼片がはねつきの衝羽根(ツクバネ)に似ていることから、ツクバネウツギとなった。

タニウツギ（谷空木）

タニウツギは北海道西部から本州の中国地方までの主に日本海側の山地に生育する落葉性の低木。名前の通り、谷沿いの二次林などに多い。花の形がウツギに似ており、春にたくさんの花を房状につける。観賞用に栽培されることもある。

開花期が田植えシーズンと重なる地域では、田植え花とか早乙女花などと呼んでいるらしい。サオトメバナは、花を取って開いた方を下にして水に浮かべた様子を早乙女が菅笠をかぶって田植えしている姿に例えたものであるという。

裏六甲（西谷を含む）地域が南限といわれている。

※　ウツギ（空木）は「卯の花」のこと。白い花を咲かすが上記二種とは異なる。ツクバネウツギ・タニウツギはスイカズラ科。ウツギ（空木）＝「卯の花」はユキノシタ科。ウツギ（空木）は名前の通り茎が中空になっているが、ツクバネウツギ・タニウツギは茎が詰まっている。

タゴガエル（田子蛙）

体長は成体が 30～58 mm、幼生が 22～28 mm。アカガエル・ヤマアカガエルと区別はつきづらい。

背面は淡褐色あるいは淡赤褐色で、<u>下顎周縁から胸の前方にかけて、黒色の小斑点で覆われているのが特徴である。</u>腹面は灰白色あるいは淡黄白色。吻（ふん）は短く、吻端（ふんたん）は尖っている。背側線は明瞭で眼の後方からひと続きになり、鼓膜の後方で若干外側に開く。　谷川の岸の穴、日陰の水たまりなどに産卵する。鳴き声は、「グッグッグッ、ゴッゴッゴッ」と岩や石の下から聞こえる。名前の由来は、両生類学者田子（タゴ）勝弥氏に献上したもの。（献上名）

5月22日（日）の植物（全て丸山で撮影）

３名（４名）の参加。巡回、ごみ回収。夏のような気候。

たった２週間で花が次つぎと変わっていきます。花期の長いもの、花期の短いもの色々です。

クサノオウ（瘡の王・草の黄）

クサノオウは北海道から九州にかけて生育する一年生の草本。林縁や土手などの比較的肥沃な場所に生育し、春に黄金色の花を咲かせる。この季節にはキンポウゲ科やアブラナ科の植物も黄色の花を群れ咲かせているので区別しにくいが、花弁を見ることができれば４弁であり、**少なくともキンポウゲ科の植物ではないことはわかる**。葉をみるとケシ科の植物である可能性が高くなるし、植物体を傷つけると、黄褐色の乳液がでるのはよい目印である。

和名は皮膚病の一種である瘡（クサ）の優れた治療薬であることから「瘡の王」であるとの説、黄色い汁を出すから「草の黄」の説がある。

コアジサイ（小紫陽花）

コアジサイは関東以西の本州、四国、九州に分布する落葉低木。明るい二次林内や林縁に普通に生える。

あまり高くならず、せいぜい 1-2m ほど。枝は比較的よく分岐し、あまり強くない。新しい枝は毛があるが、花が終わる頃までに落ちてしまうようである。葉は対生し、長さ 5-14cm、幅 3-6cm、質感は薄く、上 2/3 に規則正しい鋸歯がある。葉は両面毛が散生し、裏は脈上に毛が多い。花は 6-7 月、小さな散房状花序でかわいらしい印象の花を咲かせる。色は淡碧色からほとんど白色まで変化がある。

一般的なアジサイのような装飾花（萼の変化したもの）はない。花はすべて両性花であり種子をつける能力がある。

名前は、小型のアジサイであるため「小紫陽花」と呼ばれる。香りがよく生け花にしても楽しい。

タンナサワフタギ（耽羅沢蓋木）

タンナサワフタギは本州関東以西から九州、朝鮮に分布する落葉低木。ブナ林や二次林（夏緑林に多い）の林床や谷沿いなどに生育する。樹高は数mほどになり、サワフタギよりも大きくなる印象がある。葉はやや硬く、鋸歯は鋭くて明瞭であるが、鋸歯があまり鋭くないものもあり、時としてサワフタギと区別しにくいことがある。６月頃に枝先に白い花を房状に付ける。果実の形はゆがんでおり、黒紫色に熟す。

名前のタンナ（耽羅）は、発見地の済州島の古い呼び名のことらしい。